

奄美を伝える

奄美市立赤木名小学校 四年 原口 さつき

「メイ、今日は送りぼんだから六時までには帰ってきてね。」

夕方、走ることが好きなわたしはジョギングに行こうとしていると母に声をかけられた。

「はあい。」

ランニングシューズのくつひもをきゅつとむすびながらのんびり返事をした。

せいとう工場のえんとつからもくもく出るけむりを追いかけるように走るのは心地よい。あつという間に体中からあせがふき出てきた。「このまま海に入ったら気持ちいいだろうな。」おり返し地点で道路わきの葉が目にとまり、一まいくるくるまいて葉ぶえを作る。口に近づけてふいたしゅん間、わずかなすきまにわたしの体はすいこまれ目の前は真っ暗になった。どれくらい時間がたったのだろう。次に目をあけた時、まわりのけしきにはいわ感があった。ふしぎに思いながら来た道を走って帰る。「もうすぐスーパーが見えてくるはずだけど……。」見わたすかぎり広がるのはさとうきび畑だ。ふ安になりしげんにスピードが上がる。なんとか家にたどり着き、こきゅうを整えていると中から一人の男の人が出てきた。

「うちの太悟の同級生なわけ。」

「えっ。太悟ってお父さんのこと。ということはこの人はおじいちゃん。」わたしが生まれる前になくなったそ父は、スポーツマンで海が好きなやさしい人だったとそ母から聞いたことがある。

「太悟ならまた学校に行ったど。」

まちがいない。そ父だ。父は「ランドセルをげんかんに放りなげて校庭へ遊びに行っていた。」となつかしそうに話すことがある。なにより横顔が父にそっくりだ。

「八月おどりのシュウケ用の魚を太悟と取りに行きたかったんばやあ。じゃああんたがおじといっしょに海へ行ってくれんかい。」

「いいんですか。うれしい。行きます。」

こうしてわたしはそ父の「太新丸」という父とおじの名前が由来の船ではじめて海へ出た。地球のような緑色の海の中をぐんぐん進んで行き、魚や貝をとる手伝いをした。アカウルメはペットボトルのキャップでこすると、うろこがポロポロおもしろいように落ちた。

「はげえ、メイちゃん。ワンより上手じゃやあ。」

「えっ。はげた犬。」

「ははは。今の子は島口を知らんやあ。はげえは、びっくりした時に使う言葉で、ワンは自分のことを指す言葉なんだ。」

そ父は島口だけでなく、奄美の文化や伝とうについてくわしく教えてくれた。

「ガタンガタン。」

家の中から聞きなれない音がするのぞいてみると、

そうそ母が何かを動かしている。

「もしかして大島つむぎ。」

「そうよ。知らんわけ。昔はどの家にもはたおり機があつておつてたんばやあ。」

そうそ母がおっている女物のつむぎは男物とことなり、おり方がむずかしいため、おる人がへつていという。十年後の成人式では、わたしもしぶくてかつこいい大島つむぎを着たいと思つているので、心配になる。

つむぎおりに引きつけられている間に貝のさしみ、赤ウルメやシイラのからあげ、ヒキの南ばんづけなどおもてなし用のシュウケが完成していた。

今まで八月おどりは、ごうかな料理やおかしが目当てだった。学校で地いきの人と練習する曲は、多くある唄とおどりのうち数曲だけだ。大島つむぎや八月おどり、その他の奄美の特色ある文化や伝とうをこのままうけつぐ人がいないと、どうなるのだろうか。

夕方の放送が流れてきた。「そろそろ帰らないと。」わたしは来た時をヒントに葉ぶえを作りふいた。するとまた体がすいこまれ……

「お父さんちようちん、わたしに持たせて。」

奄美の文化や伝とうについて大切なことに気づかせてくれたそ父。「ありがとう。」今年は感しやの気持ちをこめておはかへ送った。

夕食後、そ母が一さつのアルバムを持ってきた。ページをめくると、太新丸の前でシイラを持ってわらうそ父がいた。その横には……

「お父さんの横のこの子はだれかしら。写真が古くて顔がよく分らないわ。」

「そういえば、父ちゃん、昔おれの同級生と船にのったらしいけど、それがだれだったか分らないままなんだよね。この子かな。」

「へえ。そんなことがあつたんだ。」

わたしははじめて聞いたような返事をした。

「この船、太新丸でしょう。お父さんと新平おじちゃんの名前から一文字ずつとつてつけられたんだよね。」

そ母と父がわたしの顔を見た。

「船の名前と由来、メイに教えたことあつた。」

「ん。ヒ・ミ・ツ。」

奄美の文化や伝とうがこれからもずっとつづくように、そ父から教えてもらったことを友達にも伝えて多くの人へ語りついでいこう。